

播磨 ミステリーハント

播磨町の歴史や偉人の「?」と「!」について、秘められたトピックスなども交えながら紹介します。

文責 播磨町郷土資料館 館長 宮柳靖
☎079(435)5000

◦ Mystery.8 ◦

新聞発行への波乱の人生 —ヒコ・ダイジェスト版と 新聞購入—

新聞の父と称されるジョセフ・ヒコ(浜田彦蔵 幼名は彦太郎)は、1837(天保8)年9月20日(8月21日)、播磨国加古郡古宮村(播磨町古宮)の農家に生まれました。ヒコは、偉人の中でも波乱万丈の人生を送った一人といえます。

ヒコの人生には、3つの大きな転機がありました。一つ目の転機は、父親が一年ほどで病死し、母親が隣の本庄村浜田(播磨町本荘)に住む船頭の吉左衛門と再婚したことでした。二つ目は、彦太郎が13歳(1850(嘉永3)年)のとき、船乗りになるのを反対していた母親が突然亡くなったことでした。三つ目は、渡米後、ヒコの人生を決定づけたともいえる税関長のサンダースと出会ったことでした。このように、幼い頃に農家から船乗りの家へ移り住み、元服期(働く時期)に母親が急死したことで漂流民としてアメリカへ渡る運命をたどります。さらに、そこでサンダースと出会ったことは、ヒコが教養を身につけ、国籍を取得して領事館通訳として帰国への道を拓きました。

アメリカでヒコが印象に残ったことは、人々が新聞を買って読み、漂流民の記事が詳細に掲載されて大きな反響を呼んだことでした。江戸時代は、時事報道が禁じられ、具体的な日時や場所、人名などの明記は御法度でした。



▲新聞誌



▲海外新聞

そのため、新聞で様々な出来事を知らせることの大切さを痛感したヒコは、鎖国していた日本で身を危険にさらしても新聞発行を決意したのでした。

ヒコの発案で刊行された新聞は、ヒコが外国の新聞を翻訳し、岸田吟香と間潜蔵がひらがな交じりの日本語に直して半紙に書き写していました。「新聞誌」は、最初手書きでしたが、すぐに木版刷りにし、半紙5~6枚をこよりで綴じて月3~4回発行しています。翌年には、「海外新聞」と改題し、藤で粹取りした表紙に富士を遠見に神奈川港を大きく描くなどデザインにも気を配っています。しかし、当時は、新聞に興味があっても買ってまで読む習慣はなく、また幕府の監視を恐れてか定期購読者はわずか2人でした。

このたび、播磨町がヒコ発行の貴重な新聞を購入(資料館所蔵)します。その一部を特別展で公開しています。ジョセフ・ヒコ新聞発行150周年となる来年は、すべてを公開する予定です。



町の人口 10月1日現在 住民基本台帳人口+外国籍人口。()は前年比。
34,775人(-21人) 男...17,053人(-3人) 世帯数...14,256世帯(-14世帯)
女...17,722人(-18人)